

第4回中野区基本構想審議会 部会（子育て・教育）

○日時 令和元年7月2日（火曜日）19時～21時

○会場 中野区役所7階 第8会議室

○出欠者

1 部会委員

出席者

和泉 徹彦（部会長）、新庄 恵子、相川 梓、安藤 文隆、今村 亮、
猿田 えり子、城山 智子、染谷 安紀子、藤本 飛鳥

欠席者

能登 祐克

2 中野区

企画部

基本構想担当課長 永見 英光

子ども教育部・教育委員会事務局

子ども・教育政策課長 永田 純一

保育園・幼稚園課長 濱口 求

子育て支援課長 神谷 万美

育成活動推進課長 伊藤 正秀

子ども特別支援課長 中村 誠

指導室長 宮崎 宏明

【議 事】

○和泉部会長

本日は能登委員からご都合によりご欠席とのご連絡を受けております。城山委員につきましては後ほどお見えになると思いますので、現状半数以上の部会委員の方にご出席をいただいておりますので、会議は有効に成立しております。終了の目途は9時としたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第をごらんください。次第にありますように、1、「部会第2・3回審議内容について」、2、「区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結

果について」、事務局から説明をしてもらい、第2回、3回の部会の審議内容について振り返りをしたいと思います。最後にその他として重点テーマに捉われず、子育て・教育全般について審議する時間を持ちたいと思っております。よろしいでしょうか。

それでは、本日の配付資料と部会第2・3回審議内容、区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結果について、事務局より説明をお願いします。

○永見課長

では、私から説明させていただきます。まず次第の裏に資料一覧ということで記載しております。

資料1が「子育て・教育部会（第2・3回）審議内容等の概要」でございます。資料2が「他の部会と情報共有をはかる意見」ということで、ほかの部会から子育て・教育部会に関連する意見・発言が出たものがありますので、その資料でございます。続いて、資料3が「中野区基本構想無作為抽出区民ワークショップ報告書」でございます。それから資料4が「区民と区長のタウンミーティング概要」、最後に資料5が「現行の基本構想との対応表」ということでお配りしております。

では、1つずつ簡単にご紹介させていただきたいと思っております。

まず資料の1でございますが、これまで2回の部会の発言内容をまとめたもので、答申のイメージというものも前回と同様に記載をしております。こちらの資料の中に茶色い文字で書かれている部分があるかと思っております。こちらには括弧でタウンミーティングやワークショップという書き方がされている箇所があるかと思っております。それは後ほどご説明いたしますが、区民と区長のタウンミーティングや基本構想区民と職員のワークショップを実施し、そこであった発言のうち、審議会、部会においてはあまり触れられなかった発言をこちらに書かせていただいたものですので、振り返りとあわせてご確認いただければと思っております。

それから4つの分類ですけれども、前回は「多様性」「協働」「スタートアップ」「その他」と区長のキーワードをもとに作らせていただいたのですけれども、他の部会からもその4つの分け方で本当にいいのかというような発言もいただきまして、分け方を変えてみました。左上が「多様な人と人とのつながり（まちのあり方）」ということで、これはまちには多様な人が住んでいるし来たりもすると。それから、そういった人たちがつながりあっているというまちの状態を描くという形で考えております。右のほうがこれまで「スタートアップ」という形にしておりましたが「スタートアップ」という言葉が何を意味するのか

というお話もいただきましたので「新しい行動と価値の創出」という言葉に置きかえさせていただきました。左下のほうは「区民と行政の協働」、右下のほうは「行政がすべきこと」ということを新たに設けたという分け方にしてございます。本日はこちらの資料を中心に振り返りをさせていただければと考えております。

それから、資料2ですけれども、「他の部会と情報共有をはかる意見」ということで、上のほうは他の部会から子育て・教育部会に関連する意見が出たということで、こちらの部会のほうでもご確認いただきたい、そんな主旨でございます。右のほうを見ていただきますと、子育て・教育部会の中でも同様の発言があったのか、それとも特になかったのかということが書いてありまして、上の2つ目、運動習慣に関することはあまり触れられていなかったのかなということで、後ほどご確認いただければと思います。それから下のほうが子育て・教育部会の中で出た意見で、他の部会に関連するだろうということで、他の部会のほうに引き継ぐというような発言でございます。

続いて資料3です。ワークショップの報告書でございます。表紙をめくっていただきますと、実施の概要を記載してございます。ワークショップを実施するに当たって区民の皆様約2,000人に区から通知をさせていただいて、参加をされたいという意向をいただいた方にご参加いただいたワークショップでございます。人数は、第1回が区民36名、第2回が37名ということで、1名の差は、1回目は1人欠席の方がいらっしゃったということでございます。それから2ページ目のほうに内訳がありまして、20代から70代の男女それぞれこのような構成でご参加いただいたということでございます。3ページ以降、実施の仕方についてこのような形で進めたということをもとめてございます。3ページの真ん中あたりに書いてありますけど、成果物のイメージということで、まず最初に審議会の部会単位ごとにテーマ設定をして、それぞれのテーマについて、まず最初に課題・不安ということについて出していただく。グループワークを行ったのですけれども、大体4、5人ぐらいのグループで、区の職員も中に入りました。課題・不安を出した後になりたい姿・理想という話をさせていただいて、そういったことを踏まえてグループごとに大切にしたい3つのことという形でまとめを行った。そのような形で進行をいたしました。6ページ以降、それぞれのテーマの中でこんな発言が出たということがございまして、また14ページ以降はグループワークで附箋に書いていただきながら進行したのですが、附箋に実際に書かれた言葉を記載しております。それから27ページからは参加者のアンケートなどもつけておりますので、参考までにご覧いただければと思います。

続いて資料4が区民と区長のタウンミーティングということで、子育て・教育に関しましては6月16日に桃園区民活動センターで実施いたしまして、29名の方にご参加をいただきました。資料をめくっていただきますと、グループワークを実施したわけなのですが、出た意見、またそれに対する区長のコメントという形で記載をしておりますので、ご確認いただければと思います。

最後なのですが、資料5は現行の基本構想との対応表ということで、左側のほうに現行の基本構想、一番左端の列が将来像です。それから2番目は10年後に実現するまちの姿ということで、今の基本構想にはこのように記載がされております。一方、右側のほうの答申のイメージということで、それぞれの部会の中でご発言いただいた内容をまとめたものということで記載をさせていただいております。子育て・教育に関しましては、4ページの途中から6ページにかけて報告がございまして、現行の基本構想はこう書いてある、一方今こちらの部会ではこのような話が出ているということで、こういったものをご確認いただきながら、全体のまとめとしてご活用いただければと思っております。

雑駁ではございますが、ご説明は以上となります。

○和泉部会長

ありがとうございました。それでは部会の第2・3回審議内容についての審議に移りたいと思います。

区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結果で出た意見を資料1の「子育て・教育部会（第2・3回）審議内容等の概要」に反映していると報告がありました。カラー刷りになっておりますけれども、茶色の字で書き加えられている部分がそれになっております。また資料2の「他の部会と情報共有をはかる意見」の子育て・教育部会に関連する他部会での意見についても参考にして、審議内容や答申のイメージに不足はないかご審議をお願いしたいと思います。どの部分からでも結構ですので、お気づきの点などございましたらご発言をお願いいたします。

先ほど他部会と情報共有を図る意見という資料2のところ、2番目に運動習慣についてというご指摘があったわけなのですが、これについては多分類することに関してはプレーパークを充実させましょうというようなご意見の中にあつた部分も少し入っているのかなと思うのですが、この点、ご意見いかがですか。

○城山委員

港区の「子どものあそび場づくり20の提言」という資料があります。プレーパークとい

うのは子どもが主体的にいろいろな遊びを自分たちからつくり出していくというか、もちろん危険もあるから、それは周りの人たちがうまく見守りながらということだと思うのですが、いろいろな遊具の管理とか、つくるところから地域の人もかかわってプレーリーダー等が参加していくというのです。世田谷区に住んでいる私の友人たちは、その遊具をつくることから一緒にやったりしていました。危険もあるけれども、子どもの主体性を大事にする遊び場をつくるうえで、港区がつくっている「子どものあそび場づくり 20 の提言」は、とても参考になるものです。プレーパーク自体を知らない親御さんたちもいらっしゃると思います。その場合、何か事故が起こったら「行政が悪い」となってしまうのかもしれないのですが、プレーパークというのはやっぱりみんなで作っていくものなので、親も地域も参加して、少々危険はあるかもしれないけど、子どもの自主性を大事にするということなので、こういうわかりやすい提言集などがあつたら親も意識して、その「場づくり」というのに参加できるようになるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○和泉部会長

そういった「場づくり」のところから、みんなを巻き込んで一緒につくっていく、そういう取り組みですね。

○相川委員

プレーパークという話をしてくださったので、関連して発言します。資料2に書いてある「子どもたちが、運動の大切さを理解し」というところが私としては少し気になっています。楽しいから動かすという仕掛けが地域にあることが大切で、「大切だから運動しなさい」というような押しつけでは子どもたちは動かないと思います。自然に体育の授業なり、公園なりで遊んでいるうちに楽しさを実感して習慣化していくことが大切だと思います。

「大切だからやりなさい」ではないような答申のイメージにしたいと思いました。

○和泉部会長

学校教育の中での体育の位置づけというのはいかがですか。

○新庄委員

スポーツテストをします。子どもの体力がどれぐらいなのかというのをある一定の学年で、見たりしています。東京都はずっと課題になっていますが、全国的に見ても非常に子どもたちの体力が低い傾向です。それはどこに原因があるのかというところは、家庭教育の中でもありますし、学校教育の中でもあると思います。お話しの通り、運動する楽しさ

を教えていくというのはとっても大事だと思います。ただ、中学生ぐらいになるとやはり部活動が始まりますので、部活動との関連や、地域コミュニティでのクラブに参加している子どもたち、例えばスポーツクラブ、スイミングクラブなどへ参加している子どもたちがいる中で、もっと早い段階から、幼児期から運動習慣を身につけられるといいと思います。それと同時に、場づくりというのはすごく大事で、こういう都会の中ですので、遊び場の保障も必要だと思います。先ほど城山委員がおっしゃったようなプレーパークをもっと周知していくのが大事だと思います。学校では限られた時間の中で体を動かすということで限界があり、それ以外の場の活動は大切かと思っています。

○和泉部会長

ありがとうございます。この件についてほかにご意見ございますか。

○藤本委員

プレーパーク、本当に進めたいと思っている。子どもたちが自ら遊べる環境、中野区は遊べる場所が少なすぎるので、せめて公園を用意して、ボール遊びできるところとか用意していただきたいなと思います。

○和泉部会長

ありがとうございます。この部会でのご意見のまとめ方としては、そういう場をつくるところから子どもたちを巻き込んで運動の楽しさに気づいてもらう、学校の体育に責任を押しつけるようなことはしないと、そういうあたりでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

では、その他資料1の中身など、区民と区長のタウンミーティングなどでつけ加わった部分もごさいます。何か追加してご意見などありましたらいただければと思います。

○今村委員

資料1について2つ申し上げます。

1つが(5)なのですが、前回かなりこの(5)の議論、非常に白熱して時間が足りずに終わったので、今日ここの議論がもう少しできるといいなと思いました。

私の意見としては、次の4月から学習指導要領が小学校では新しくなり、大きな変化を迎えますが、そこを区としても学校を支えていくというようなことをいろいろな形で入れたほうがいいなと思いました。区がというのは、区役所の区長部局がという限定的なものではなくて、私たちやまちが支えていくということが入っていくといいなと思いました。やはり都の教育委員会のほうで用意されているものにそれぞれの区ごとの独自のサポート

がどう入のかというのが学校教育の質をかなり変えているなど実感しているので、中野区らしい学校の支え方というのはどういうことかというのがもうちょっと議論できるというなど感じております。

それと、あとは私のもう1つつけ加えると、(2)の意見の中で、区として児童相談所の設置を検討しているという話がありましたので、これは非常にすばらしいことなので、その後「あれは迷惑施設である」というような反対の声にも負けないような、この審議会ですそれを応援したいという声があったということをつけ加えていただけるとありがたいなと思いました。

○和泉部会長

児童相談所に関しては子ども・子育て会議でもたびたび議論、話題になっておりまして、やはりそういった独自の自治体の中で完結する形で進めていくというのはすごく大事なことでだなど感じておるところです。

○新庄委員

今、今村委員がおっしゃった学校を区として支えていくような取り組みということに関して、今日、中野区報を拝見しました。7月5日号に「学校と地域のステキな関係」と題して、どういうふうに地域がかかわっているかということが掲載されています。学校支援ボランティアについて詳しく書かれています。学校を区としてサポートする、地域でサポートできるような、そういうものを新しくつくるというよりも既存のものを学校ごとに工夫して取り組んでいけるようなシステムが必要かと思います。例えば地域運営学校、コミュニティスクールなどです。そこまでは難しいとしても、こういうものが充実できるような提言が入っていくといいかと思っています。

○和泉部会長

今、新庄先生がおっしゃったところというのはやはり今、空欄になっていますけれども、やはり多様な人と人とのつながりの部分に関連した部分だと思いますので、そういうところを少し埋めていきたいと考えております。特に学校ボランティアのあり方というのは子ども・子育て会議でも少し話題になったときには、学校が何を欲しているのだと、どういうボランティアを必要としているのかがなかなか見えない。あるいはボランティアに登録しようと思うのだけれども、学校側からどういうふうに来るのかわからない。そのコーディネートの部分というのがなかなかうまくいかないということがありまして、結果的にこれまでやってくれた方にまたお願いするというようなつながり方というのがどうしても現

状になってしまっているところもご指摘としてはあったのかなと思っております。どういう形で学校ボランティアを学校とつなげていくのか。このあたりについて何かご意見ございますか。

○相川委員

意見ではなく、今お話にあったコミュニティスクールということを最近、まさに知って、文部科学省が推進していて全国に広めようとしている取り組みだと理解しています。三鷹市などは率先して進めているということを知りました。中野区ではまだやっていない。私はまだあまりコミュニティスクールについて詳しくないのですが、PTAとも違って学校運営協議会というのが地域にあると伺っております。中野区だと児童館を中心に運営協議会といったものがあり、そちらの会議に私は参加したことがあるのですが、学校についてはまだない。ただ、児童館については存在しているということで、コミュニティスクールに近いものはある程度あるということが、本当に心強いなと思っています。また各町会の地区委員会でミニリーダー講習会という形で希望者にボーイスカウトではないですが、いろいろな体験をするということを率先して地域の方たちが中野区ではやってくださっていると理解しています。それをもう少し参加しやすい、支援に入りやすいような仕組み、ビジョンを掲げて、かかわりたいと思ったときにかかわれるような雰囲気をつくれるといいのかなと思っています。その際に忘れてはいけないのは、今、犯罪、子どもを巻き込んだ事件というのが実際に発生している中で、そういった活動に参加される方の認証の仕組みというのをどう取っていくか、「参加したい」といったときに、その人がどんな人なのかというある程度チェックが必要ということは今の時代、忘れてはいけないところだと思っています。その認証がうまくいくと、PTAも強制参加という形ではなく、参加したい人が参加したいときに学校に協力するというような、そういう形にも発展していくと思っています。その際は紙ではなくICTを上手に活用することがおそらく大切になってくると思います。気軽にこういうのがあるから参加したい、という人が手を挙げることができる仕掛けを推進できないかなということを考えております。

○和泉部会長

ありがとうございます。

○相川委員

質問なのですが、中野区でコミュニティスクールを導入するかどうかというのは、今までも検討はされてきたのでしょうか。

○宮崎指導室長

検討しています。国もそうした方向を示しておりますし、昨年度から、我々としても新しい学校の形を模索しているいろいろ勉強して、情報を集めているところでございます。

○藤本委員

教育委員会、指導室長のお考えも私はいいなと思います。PTAとしても地域とのつながりを進めていきたいと思っているのですけれども、学校と地域のつながりをつなぐためにPTAは力を注ぎたいなというのもありまして、今、実際に子どもたちに力を注ぐにあたって、もっと力を入れなければいけないところが、地域の方々の後継の事です。地域では実際に高齢化が進んでいまして、人が足りない状況、次を引き継ぐ方がいらっしやらないのです。今、どうなっているかという、地域の活動をPTAのほうでやってくれないかとPTAに話しがきています。PTAがそこまでやるのかという、PTAにさらに負担がかかって、重たいです。地域も地域で子どもの目線で、地域の方々が取り組みやすい仕組みが必要だと思います。地域の方々が活動できることによって子どもが育つので、地域の方々がうまく活動できる仕組みを、区がサポートできるようなことがあってもいいのかなと。地域に任せている状況だと多分このままなくなっていくのではないのかな、PTAと同じように。そんな懸念があります。どうしても子どもに目が行ってしまうのですけれども、地域で子どもを育ててほしいので、そのためには地域の基盤づくりというのがとても大事なのかなと思います。

城山委員

この間、議会を少しだけ傍聴したときに、町会費とか徴収するのが大変で、それをスマホ決済するという提案がされていたのではないかなと思うのですけれども、町会費を集めるのは本当に大変です。

○藤本委員

うちの町会でもなかなか大変です。場所が場所で、地域の中でも離れている場所なので、どちらかというと隣の町会に結構参加していることがあって、自分の町会は参加しない。そのせいもあって、うまくいっていない。実際にほかの町会から場所が離れているので、ここ最近、何人もやめてしまった状況です。まちづくり、今、学区域などもですけれども、地域の見直しというのが必要だと思います。区分けといいますか、町会の区分けを区ができないのでしょうか、何か良い町会の区分けで、子どもたちの負担も減ると思います。

○城山委員

学校みたいに統合するとか。

○藤本委員

そうですね。統合でなおさらおかしなことになってしまっているのですけれども、何とも言えないのですけれども、なおさら地域活動が負担といたしますか。そんな感じはしますね。ちょっと今の現状と合っていない。

○城山委員

ICTを使ってシステムとかつくったら。でもお年寄り等は使えないかもしれないけれども、使える若い人だけでも、夜しか家にいない人とかには、良いのではないのでしょうか。

○藤本委員

さっきもお話が出ましたが、ボランティアだけだと限界があるのかなど。自分の仕事をやって、それぞれ生活があって、その中でボランティアで例えばICTに取り込もうとなってくるとなると、相当なパワーがかかると思うのです。それであれば別に企業、営利団体等を活用してもいいのかなというのがあります。選定して、営利団体を利用して地域の活性化とか子育て支援に活用する。ボランティアに固執する必要はないのかなと思います。

○城山委員

若い人をどうやって入れたらいいのでしょうかね。ひとり暮らしの人とか、学生さんとか。孤立してしまう人もいるだろうし。本当はちょっと行ってみたいとか思いながら、どう関わっていいかわからないというような人にも地域の活動に参加してもらえるように。

○藤本委員

そうですね。働ける場所といたしますか、ニュースであった悲惨な事件の1つは防げるかもしれないです。30代、40代の方々は、悩みをすごく抱えているので、その影響が子どもに今「大人たちってつらそう」という姿が見えてしまうのです。先生たちも今「何で先生たちってつらそうなんだろう」と子どもたちの目線では見えてしまう。大人たちが楽しく気持ちよくいないと子どもたちは育たないのかなと僕は思っています。目線は子どもたちであり、やらなければいけないのは、その基盤である大人たちの環境整備だと思います。

○相川委員

うちの子どもがお世話になっているミニリーダー会で、去年まで紙で申し込みだったのが、今年グーグルフォームで申し込みができるようになって、徐々にですが変わってきて

いるのだなと感じています。私が個人的な趣味で先週末、CIVIC TECH FORUM（シビック・テック・フォーラム）というものに参加してきたのですが、市民がテクノロジーを駆使して公共に寄与するといった活動です。そこで話を聞いたのが GovTech（ガブテック）という概念です。テクノロジーで効率化していったその余力を、例えば新しく入ってきた人をコーディネートする力とか、そういうところに使っていけるといいのかなとも思っています。区の職員の方々もうまく ICT を使って効率化して、今、保育園の申し込みも手書きばかりで本当に大変だと思います。そういった作業を効率化して空いた時間を区民の方への相談やコーディネートするところに使っていく。また市民の人もうまく空いた時間を少しずつ地域のために使っていくことができるプラットフォームが作れるといいなと思っています。

先ほど話があったので教育の話で、私なりにちょっと考えてきたことをせっかくなのでお伝えしたいと思います。

そもそも、子どもたちは何のために学ぶのか？と思ったら、テストの点をとるためだけではないと思うのです。最近 ICT という話、エドテック環境を整えるという話が、未来の教室ということで経済産業省が進めているという話も勉強中なのですが、ICT は道具であって、生きていくための武器なので、それを基礎知識として学ぶということを公教育で広くやるということはまず必要だろうなと思っています。

それ以外に教育といったときに何だろうと思うと、試行錯誤できる環境を大人が用意してあげることなのかなと思っています。与えられたことを覚えるだけではなく、自分で考えてそれをトライしてみて、実際の社会に出てから失敗すると大変なことになりますけど、教育を受けている環境であれば、命にかかわるようなことは別ですけども、たくさん失敗もできる、そこを保障してあげるとというのが教育にとって大事なかなと思っています。

例えば「何で空は青いの？」と子どもが思ったときに「そんなことを考えないでこっちをやりなさい」と言うのではなく、一緒に寄り添って「何でだろうね」と大人と子どもと一緒に学び合えるような環境があると良いと考えています。地域の人もただボランティアの動員として参加するのではなく、子どもと一緒に学び合えるような、そのような環境が教育環境として大切だと思います。すごく大きい話になりますが、子どもたちだけの教育でもなく、大人になってからも学び続ける。その習慣を大人たちが持っていて、学び合っている姿を大人が見せることそのものも教育にとって大事なかなと思っています。ただの親としての理想なのですから。

○今村委員

今、おっしゃったようなことは区の教育ビジョンのほうにもかなり近いことが触れられているので、今回の基本構想がそれをサポートするような形で同じ目標を区と学校教育がきっちりタッグを組んで進めていくというような強いメッセージが出せるといいと思いました。

○和泉部会長

資料1を中心に、重点テーマに関連して議論をしてきましたが、まだ埋まっていない部分もありますし、またこういう表現でいいのかなというのも含めてご意見いただければと思っています。

○藤本委員

答申のイメージがこれでいいかということですよ。

○和泉部会長

そうですね。たたき台として事務局につくっていただきましたけれども、「いや、こうじゃないでしょう」という意見があってももちろん構わないと思っています。

○藤本委員

前回は聞いたかもしれませんが、答申のイメージがあって、この答申のイメージからどなたかが具体的に落とし込んでいく形になるのですか。計画といいますか、区のほうが最後はまとめるのですか。

○永見課長

答申そのものは審議会のほうからいただく形にはなりますが、区のほうで改めて答申の文案をつくって、ご覧いただいてという形にはなるとしています。

○藤本委員

そうですね。その答申のイメージが漠然としすぎて捉え方がみんなこれ見る人によって違う感じになるのかなと。どこまで具体的にしたらいいのかといいますか。もちろんこの発言内容によって補足はされるのですけれども、だからプレーパーク、具体的なことがわかれば、わかりやすいのですが、「児童がのびのび安心して育つ環境を」と、じゃあ具体的にどうなっていくのだろうと。それができ上がったときに、でき上がった像ができたときに「いや、そうじゃなかったんだけどな」とならないようにしたいなと思うのです。

○和泉部会長

答申のイメージの中にプレーパークというキーワードが入ってしまうと、それはもう区

としてやらなければいけないよねという話にもなります。

○藤本委員

その方が、わかりやすいと思うのです。区民の方々もそのうち見るのかもしれないですけども、イメージが湧きやすいほうがいいのかなと。「ああ、こう考えているのだ」と。「プレーパークやるんだ」「いやいや、プレーパークはやめようよ」と意見を出しやすくして、逆に「子どもがのびのびと安心して子育てができるように」だとみんなそう思っていると思うのです。そんな表現といいますか、最終的にどう書かれて中野区がどうなっていくのだろうというのが、結局皆が望んでいるものが言葉になっているだけだと思うのです。

○染谷委員

私も同感で、答申というものの自体がこういうものであるならば、理想を語っていけばいいのかな。やはり具体性があるって、プレーパークといったような何か具体的なものを入れていったほうがより現実に近い。答申はそういうものではないのですか。

○和泉部会長

今回、答申をした後、基本構想の案を区長が議会にかけます。そこに具体的な言葉、キーワードが入っていたときに、それに類するものを実現しようと思ったときに、もしかしたら10年したらそれはもう違う概念になっているかもしれないとか、そういう長い時間に耐えられる表現になっているかというのも議論しなければいけないのかなと思います。

○藤本委員

そこを臨機応変にできるなら、プレーパークは「こういう理由で変えられる」とか、具体的なものがわかっていけば具体的にどこを補わなければならないと話し合えるのかなと。というのも例えば10年後に、みんなそれぞれ「基本構想審議会でやったのだよね」という声が出たときに、区の方々を含めて「これはちゃんと区民の声を聞いてやったのです、考えたのですよ」と言えるようになっていると良いと思います。

○永見課長

基本構想にどこまで具体的なことを書くのかということですが、基本構想は考え方というか、こういう環境があるべきだとか、それなりに抽象度の高いものになるのが一般的ではあるかなと思います。ただ、基本構想を実現するための基本計画を同時進行で検討し、来年度中につくる予定になっております。計画の中で、例えばプレーパークでありますとか、実際に発言のあった内容が基本構想に比べると具体的に記載される可能性というのはあるかなと思っておりますので、そんな形でご理解をいただくと幸いです。

○藤本委員

わかりました。仕方ないところではあるかなと思います。

○和泉部会長

ちょっと抽象度が高まってしまうかもしれないですね。

○藤本委員

そういう懸念点をちょっと頭の片隅にでも置いておいて頂ければと思います。

○今村委員

私も、どういう文言を入れるといいかというのは本当におっしゃるとおりだと思って、施策の具体性ではなく抽象的な表現でこれを推し進めるには、何なのだろうなどご意見でずっと考えていました。特に区長が子育て先進区にするのだとおっしゃる以上、それは何を意味するのかというのをメッセージにしていきたいですね。きっと落としどころとしては、この予算の中でかけられる教育や福祉についての予算の比重が、比重が変えられている部分、みたいなことになっていき、皆さんが予算とかとりやすくなるようなことになればいいのだろうなと思っています。

○和泉部会長

今、重点テーマ5のところでは社会変化に対応した教育・保育のところでは、学校教育あるいはその地域とのかかわりについてご意見を挙げていただきましたけれども、保育に関してもやはり大事なところで、幼稚園の役割であったり、あるいは保育所の役割であったり、その地域とのつながりというがとても重要になってくるのではないかなと思うのですが、安藤先生、いかがですか。

○安藤委員

今、いろいろお話をうかがっていて、一番感じたのがプレイパークの対象を、幼稚園生というか、小学生とかどこを対象にしているかなと思ったのです。それからあともう1つは、いろいろ子どもにかかわることでボランティア、町会・自治会がやっているのですが、どういう運動がいいのか、要するにコミュニケーションを取るような運動がいいのか、子どもたちが自由闊達に動かせる運動がいいのかその辺のところは分かりにくいと感じたのです。子どもが近所の公園、もしくは家の中で暴れ回ると、非常に周りが迷惑するということなのです。そこへいくと、幼稚園の園庭なら、要するに管理が行き届いて、子どもが暴れても平気なわけです。だから最近では幼稚園で預かり保育を実施しています。今まで2時までの保育だったのですが、預かり保育のニーズが増えています。親が

ついていなくても安心して遊べるスペースということでやっています。だからそういう面で、地域とのコミュニケーションも感じるのですけれども、先日は、地域のお年寄りを呼んで、移動動物園をやったのです。地域の人たちを呼んで、非常に好評でした。そういう企画を知っている方も少ないし、経験もないだろうということで。生きたものを扱うというのが、命の大切さと、生きたものを触るという経験がほとんどないと思うのです。動物園でも行かない限り。僕もふだん忙しくて、自分が子育て中に幼稚園の職員に言われて、「先生のお子さんは生きた動物を知らないですね、絵の中の動物しか知りませんね」と言われてしまったのです。非常にショックで、動物園に連れて行っている暇もないから、移動動物園を年に1回呼ぶようにしました。要するに動物とのふれあいということで。

体を動かすということは、スポーツなのか、自由闊達な砂遊びとかブランコ遊びなのか。子どもたちの居場所というのが非常に今限られていて、ボール遊びができないとか。来週、幼稚園にプロ野球の球団が来て、子どものボール投げを指導するのです。非常に今、野球人口というのが減ってしまっただけでね。野球には、グローブとバットという道具が必要。皆さんもうほとんどの方が、幼稚園の園児でもほとんどがサッカーが人気です。ボール1個でできますから。道具が要らないわけです。「指導に今度ぜひ行かせてください」と電話がありましたね。野球を、もちろん年長さんがせいぜいだろうと、それ以下はちょっと無理かと思っただけなんですけれどもね。そういうことも、コミュニケーションというか、運動とのふれあいというか、自分たちが体験することが非常に大切だと思います。体験することが、自分たちの興味を持つということだと思います。

だから、そういう意味では秋にも、四重奏を呼んでいるのです。バイオリンとかピアノとかフルートとか。音楽に触れさせるという企画を今、立ててやるわけです。だからたくさん体験して、その中で1つでもいいから子どもたちの興味を引くということが大切だと最近では思うようになりました。いろいろな体験をさせる。無駄な動きでも何でもいいのです。子どもたちに体験させるということがこのプレーパークの目的の1つとなってくればいいかなと思っています。

○和泉部会長

そういったさまざまな活動を幼稚園児たちが体験する、地域の人たちともそういったかわりを持つということというのが大切というお話ですよ。地域とのかかわりというところでいいますと、保育園のほうはいかがですか。

○染谷委員

どんな人でもいつでもどうぞという園にしたいというのが理想なのですね。今、理想のままになってしまっていて、安全性の問題が確認するところがないと、門を開けっ放しにできないというところがあるので、今、課題であり、地域とのかかわりといいながら、何しているのだろうなという思いがあります。まだ就園していないお子さんに対しての離乳食講座とか、そういう予定した人は迎え入れられますけれども、本当に「いつでもどなたでもどうぞ」というような園だったらどういうふうにしたらできるのだろうというのが課題です。やったらやったで、もしかしたらできるのかもしれないけれども、そこまで今の時代なかなか踏み切れない難しさがあったりして、「もし何かあったらどうするんですか」という。万が一というところへのしっかりした対応だとか、不備がないようにするというところがずっと課題だと思っていて、何かやらなければいけないなと思っただけでも。開放したいと思っているのですよ、園庭も園舎も。「どうぞ、どうぞ」と言いたいのですけれども。人材確保の問題もありますし、さまざまな問題があって、踏み切れないもどかしさがあります。

○和泉部会長

今後 10 年ということのスパンで考えるとまた違った変化もあるかもしれないとは思いますが、現状としてはまだ踏み出せない。

○染谷委員

事前に分かっている方を対象とするのだったら、もちろんできるのですけれども。

○今村委員

2020 年代の中野って、最初にいただいたデータは転入傾向がどんどん進んで、外国人もどんどん増えるという中で、開ける教育にしていくのか、閉じて守る教育にしていくかというのは難しいところだと思います。ちょうど、今月はいろいろな事件もありましたので、どちらが正しい教育なのか難しいですよ。

○城山委員

大阪の大空小学校というところがあります。常時いろいろな地域の人が入ってきて、学校の活動に参加します。もちろん ID をつけて入ってくるのですけれども。子どもたちの面倒をみてくれます。大空小学校を舞台とする「みんなの学校」という映画の自主上映会が全国各地に広まっています。大空小学校のようにできれば理想的ですけど、どうなのですかね。がっちりガードしていれば問題ないのかと言ったら、そういうわけでもないのです。とても地域に開いているけど、何も問題がないところもあるわけですから。「みんなの学校」

は、地域の人たちがいじめとかそういうのも一緒になって考えてくれたりして、本当に出入りがすごく頻繁な学校です。

○今村委員

できれば理想は2020年代の流動性の高い中野において、たまたま仕事の都合、学校の都合で出会った、接した中野区で「ここで子どもを育てたいな」と親は思い、子どもが地域とかかわりながら伸びていくとなるとすごくいいですね。やっぱり子どもを保育園に入れたり、小学校に入れたりするタイミングは親としてはギャンブルで、このまちで本当にすくすく育ってくれるだろうか。そこで、このまちなら安心だと。幼稚園や保育園はもちろん、このまちの学校に、子どもを預けたい。そう思ってもらえる中野区にしていきたいです。その中でセキュリティを保ち、安全であること、安全な中で失敗させてあげられる教育ができればいいと思います。

○城山委員

「子育て支援が日本を救う（政策効果の統計分析）（柴田悠著）」という本を読んでいます。自殺とか子どもの貧困の話とか出てきますが、中野も子育てをキーワードにして中野区を盛り立てたいということであれば、保育サービス、お父さんのを含めた育休・産休、児童手当等を充実させることによって女性労働率を上げ、働きやすく、休暇のとりやすい環境をつくり、子育てしやすく、出生率が上がるという風にしていくべきです。労働環境が充実することで、子どもの貧困率にもいい影響があるとか、自殺率を下げることもできるとか。この本は財政、統計的に分析されているのですけれども、他の部会の内容とのかかわりで見えていくことも大事だと思います。例えば、ここは女性労働率、独立等の関係で自殺率を見たり、高齢化の問題と自殺率との関係を見たりとかもしているのですが、結局、労働生産性が上がっていけば経済成長ができて、財政に余裕が出てくる。この本は日本の国全体で見ているわけですが、中野でも地域のレベルでそういうものの見方ができるのではないかなと思うのです。だから答申をするときに、そういう相関関係がわかりやすく、ここをこういうふうに充実させるからこういうふうに中野が全体的に、経済的にも活力を生んで、自殺とか子どもの貧困とかにもすごくいい影響があるという循環図みたいなものをイメージとして提示できればわかりやすいかなと思ったのです。

○藤本委員

わかりやすいですね。

○城山委員

勉強不足でちゃんと説明できないですけれども。

○和泉部会長

著者の柴田先生とはテレビの番組でご一緒したこともあって。まさにその本を出された直後ぐらいだったと思いますけれども。ただ、こういったイメージは理解するのに「こういう切り取り方をしたら理解できた」と納得感はあるのですけれども、現実なかなか複雑で、単純にこういう相関で説明し切れるかといったら難しく、我々の答申をどういうイメージとして区に提示するか。報告書のような、あるいは箇条書きのままでいいのかという、その問題意識というのはもちろんありますので、こういった取り組みをしたときに目指す到達点というにはどこにあるのか、そういうのをぜひ提示してみたいなと思うのですよね。

○相川委員

ここに出ていないキーワードとしては「日本の子どもは自己肯定感が低い」ということが昨今言われてきていると思います。例えば、目指すビジョンの1つのキーワードとして「理由はわからないけど、中野区の子どもは自己肯定感がとても高い」ということを目指すのは面白いかなと思います。それをキーワードに、それについてできることをブレイクダウンしていくと、3歳まで子育てをしている乳幼児の親が苦しんでいないことが浮かび上がってきたり、学校で1人ひとりがそれぞれ「全体の中の何位」ではなく、「去年より自分は成長した」と思えるかどうか、といったところにフォーカスしていける可能性があるのかなと思いました。

○和泉部会長

確かに今、学校教育の中でも、例えば小学校は絶対評価になっていて、我々が子どものころに経験したような1から5がつくようなそういう評価ではないと。親からすると全体の中の位置がわかりにくいんだけど、全体の位置をわかる必要があるのかというところに、次の教育改革はあって、1人1人が自分の目標を達成していくという、そういう教育のあり方というのが次の教育改革では求められているのではないかなという理解を私はしています。それに合わせた形でそれぞれ自分の課題を、目標を達成できたという自己肯定感といったものをしっかり子どもたち1人1人が持てるような、そういう方向というのは大事なのかなと思います。

○相川委員

自己肯定感がどうやったら増すのかと思うと、まずはやっぱり親だと思うのです。親が

「あなたはここにいていいんだよ」と笑顔で家庭と過ごせる時間を増やしていく。そのために必要な支援で、最初の1番の「子育てが楽しくなる地域環境」というのは大事だと思います。ただ、今、子どもの貧困などと言われるように、親自身余裕がなくなっている状況があって、保育サービスには、私もお世話になっていて、大変ありがたいのですが、仕事も子育てもやって余裕がなくなっている、また本当に稼がなければいけなくて仕方なく忙しくなっている親もいる反面、女性誌などで共働きする女性が格好いいとってきている現実があり、最近専業主婦のお母さんたちが逆に罪悪感を感じているケースもあると聞いています。私は社会に貢献していないし輝く女性でもないみたいな形で負い目を感じてしまっているという課題があると思っています。そのような複雑な課題を抱えた家庭環境でなかなか自己肯定感を持たない子どもたちはどうしたらいいのか？といった時に、まずは公教育の中で、それを育むきっかけ、当然親ができれば一番なのですが、親ができない場合は何とか公教育で救える可能性がある環境が理想だと思います。勉強だけではなく、多様な人間関係性の中で、「この子はこういうところがいいだね」ときちんと認めて伝えてあげられるようになるといいのかなと思っています。

あと1つ問題意識としてあるのが、今の子どもたちがふれあう大人のバリエーションというのがすごく今、減っているのではないかという話があります。両親共働きで学校の先生とだけ会う。親戚づきあいも前より減っていて、地域の商店街でおじちゃんおばちゃんと気軽に話をするということもすごく減っている。そのバリエーションを増やすといったときに地域で信頼できる大人が混ざる環境を作る。一番多くの子どもたちが通うのは公教育だったり地域教育なので、多様な大人と出会える場というのをつくっていいなと思います。様々な大人がいて選択肢があることを子どもたち自身が認識することで、自己肯定感が上がりやすくなる可能性がある気がしています。

○安藤委員

今、保育サービスって何なのだろうと、一番感じています。親に対してのサービスなのか、子どもに対してのサービスなのか。我々はサービスという言葉は使いたくないのです。やはり教育なのです。親に対してのサービスばかりで気になります。僕が賛成できるのは、育休や産休については、僕は賛成。親とのかかわりの時間帯を減らそうというような、子どもの貧困、親が共働きだと切り離すことばかりで、いかに親と子が一緒にいられるかという政策が1つも出ていないのです。親へのサービスばかりだと思います。親子でコミュニケーション、周りの人たちとの接触、いろいろな体験を通して子どもたちがどうや

って育っていくのか、親とどうやって接点を持っていくのかがすごく最近気になります。今度の保育料の無償化問題も親とすれば助かると思います。ただ政策の中に、お金の問題ばかりで、親と子の教育をどういうふうに構築していったらいいのだろうというのは1つも出ていないのです。

○今村委員

僕も、保育園に、土曜日まで預かってもらってやらないと回らないような共働きをしています。それは恥ずかしながら結構貧乏だからというのがあって、二人で思い切り働かないとなかなか子育てが難しい。それなので、助かっています。そういう若い子育て世帯は少ないと思います。公教育で、私は2020年代の中野区に期待するのは、公教育はセフティネットとしての役割が重要になってくると思っています。外国人も増え、いろいろな特性の多様化に対応する必要も出てくると、なかなか学級運営のような考え方で公教育は成り立たなくなってくる。もしかしたら裕福な家庭は公教育を選ばなくなるかもしれない、公教育が悪いと言っている意味ではないのですけれども、より先生方の負担は増していく2020年代の中野の学校教育は想像がつくところです。でも、そこで1人も取りこぼさないですむような中野の教育にするために、総がかりで支えていけるようにしていきたいという願いはとともあります。

○安藤委員

変な言い方かもしれないけど、要するに夫婦共働きしなくてもいいような政策が出てくればいいかなと思います。働く意欲等も確かにあるわけですが、働いていない母親は負い目を感じてはいないと思います。親子のコミュニティをどうもっていったらいいのか。今、考えられているのは、親へのサービスばかりだと思います。

○藤本委員

私は、考え方は多種多様でいいかなと思いますし、共働きであろうと共働きでなかろうと、今ここに出てくるところも別に親だけの目線ではなくて、子どもも組み込まれているかなと、今の情報の中では思います。

ただ、子育ては正解が見えないといえますか、ゴールが何をもって子育てが成功とするかというのが曖昧なところではあるので、何を良しとするかがやっぱり難しいところではあるのですけれども、私の意見としては地域と子どもたち。この10年先、今いる子どもたちが、今の大人たちを見て、自分たちも貢献しなければといえますか、自分たちも地域活動、こうやって育てられたのだから、地域に育てられたのだから、地域に僕たちが今度子

どもたちを育てなければという環境になっていくといいと思っています。

○城山委員

この間、おもしろい方に会いました。ずっと専業主婦だったのですが、1,300円の時給から始めて、今は、大企業のすごく重要な部門で働いていらっしゃる方です。女性も子どもを産んだりして一時仕事をやめたりしても、また労働市場に入っていくときに、パートだとすごく安いですが、その方が今、進めていらっしゃるの観光業で女性の働き口を増やしていくということで、正規のいい給料をもらえるようにしていくことなのです。もちろん、いろいろな女性の選択があるので、専業主婦でもいいし、共働きでもそれぞれいろいろな選択があつていいと思うのですが、子どもから手が離れてもっとバリバリ働きたいというときに、同じ仕事をやっても安いお金しかもらえないというのはあまりにもおかしいし、そういう意味で女性の働き方がもっと多様になっていけば、家庭ももっと潤っていくわけだし、子どもの貧困等も解消していくかもしれない。余裕のある家庭ばかりじゃないと思いますので。今すごく家庭の所得が下がってきていて、そういうのも統計的に見れば中野区でも出てくると思うのですが、女性が働きたければ働ける環境をつくるということ、そのための子育て支援というのはやっぱりとても大事だと思います。

○安藤委員

1番は給与問題です。要するに奥さんがアルバイトできるのは109万までだよ。

○和泉部会長

今、社会保険の扶養というのは130万で、今、大企業のパートは106万。今、提案されているのは80万くらいまで下げようという話です。

○安藤委員

そういうのは税金払っても払ってもらったほうがいいわけですが。確かに働く喜びというのはわかります。ただ政策的に見ていくと、何か親子を切り離していくような政策に見えてしょうがないのです。幼稚園側から見ると「それ働け、それ働け」と、けしかけているような感じなのです。

○相川委員

そういう意味だと区の政策とは離れた話ですが、週に3日だけ働く。それで夫婦で3日と3日働いて、幼稚園に通わせるといったバリエーションがある環境が望ましい姿だと思います。

○安藤委員

そういうのが理想です。

○相川委員

正社員だけではなくて同一賃金同一労働という形で、1日5時間だけどちゃんと時給は正社員並みにもらえる、福利厚生もあるというような流れに世の中がなっていくといいのだろうなと思います。

○和泉部会長

今、話がワーク・ライフ・バランスにいきました。まさに子育てとか教育に関していろいろ目標を定めるというときに、世の中のワーク・ライフ・バランスがどの程度進んでいくのかというのは、環境の前提条件としてそれも大事なことではないかなと思います。今、専業主婦がどんどん減っているのは確かで、今、共働き世帯のほうが逆転をして多くなっています。そのときに考えなければいけないのは、男性の働き方というのも今、変わらざるを得ない状況になっているということです。つまり、専業主婦世帯が成り立った前提というのは、男性が終身雇用で定年までしっかりした給料の水準で働き続けられるという前提があったわけですが、今、大企業含めて「終身雇用は無理」と言い出し始めている状況ですから、子育て終わった後も専業主婦でいられるかどうかということが今、男性の働き方が変わったことによって、おのずと女性の働き方も変わらざるを得ないかもしれない。こういう時代の変化というのがあるというのも考えなければいけない。そのときに、日本の女性の就労というのが結婚・出産で中断してしまう方が多くて、そうなったときに、生涯キャリアを続けるといったことがなかなか難しいとなったときに育児休業を取って、保育所を利用して、働き続けてキャリアを続けた方というのが生涯働き続けるような働き方も選択できるという状況になりつつあるのです。本当に多様性という言葉が成り立つし、男性の働き方というのも恐らく変わらざるを得ない。それにつれて専業主婦というあり方も本当にごく一部の人しかそれは選べない選択肢になりつつあるかもしれない。そういった社会の変化というのでも考慮したほうがいいと思います。

○城山委員

この『育メン』現象の社会学(石井クンツ昌子著)」という本に書いてあるのですが、小さいときからそういうジェンダー教育を重視すべきだと思います。男だからこうしなければいけない、女だからこうしなければいけないとかいうのではなく、伝統的な考えとは違うかもしれないのですが、多様な価値観を受け入れる教育です。教育の中にはいわゆ

る「隠れたカリキュラム」があると思いますので、しっかりとそういう多様性を認める内容になっているかを確認すべきです。例えば、中野区はちゃんと徹底してやっていますよというのがあって良いと思います。ご飯をつくるのはお母さんだけじゃないよと。知らず知らずに先生は言うてしまうのですよね。「お母さん、お弁当作ってくれた」とか。お父さんもつくりますよね、お弁当を。小さいときからそういう意識を中野区は徹底して教えていますと。さっきの自己肯定感もそうだけど、男の子も女の子も、LGBT等いろいろな多様なものを受け入れていく。そういうものがカリキュラムの中にしっかりと中野区は入っているのです、と言えるようにすると良いと思います。小さいときからそうやっていると、大きくなったときに多様な働き方を受け入れやすくなるし、中野区の特徴を出すときに、そういう部分から始めるというのもいいかなと思います。

○相川委員

今、中野区の保育園は、フルタイムじゃないと入れない状態なのですが、多分今後10年というのは枠も空いてくる時代になると思います。そうなったときにフルタイムじゃなくて週に3日働いている人も預けられるような、そういうモデルを中野区が中心となり推進していく、短期・一時保育ではなく、週2日だけ預けられるような保育園を増やしていけると良いと思います。そうすると、多様な家庭環境に寄り添えるようになると思います。

○和泉部会長

今、子ども・子育て支援事業計画の次の策定の最中で子ども・子育て会議をやっています。そこに提示された中野区子ども・子育てアンケート調査結果の中で出てきたのは、3歳以上で幼稚園に入りたいという人たち。幼児教育無償化というのも1つのきっかけではありますが、週3日だけ働くという働き方をする方というのは、おそらく幼稚園に入りたいと思われそうです。幼稚園に十分な受け入れのキャパシティがあるかということもありますし、保育所というのもこれから変わらざるを得ない。保育園の待機児童が解消した後というのは、そういったさまざまな事情を持っている、さまざまな条件の方を受け入れなければいけないというところでは、認定こども園のような両方の要素を持った形で運営していくところがだんだん増えていかざるを得ないという状況があると思います。それは10年後を見通した場合の方向性だと思っています。

○相川委員

そのときに就労していない家庭、専業主婦で子育てがしんどいという人が定期的に毎週

預けられるような一時保育ができれば本当に良いと思っていて、3歳以上、保育園・幼稚園に入ってから相談できる方もいて、気持ちが楽になる保護者も増えるので、定期的な子育て環境、保育園に週1回でも預けられるというのは基本構想に入れるには具体的すぎる案だとは思いますが、何かそれを感じさせるような表現ができればいいなと思います。

○藤本委員

そういう考えを検討する余地はありますよね。答申イメージが最後ですよ。答申イメージをどうするかですよ。ここを変えない限りは今の会話は我々だけの共有になってしまうので、難しいです。

○和泉部会長

今、答申イメージというご発言もあったところなのですが、(1)子育てが楽しくなる地域環境のところの「新しい構造と価値の創出」のところはまだ空欄になっています。先ほどあったプレーパークというのがあって、その答申イメージの中で行政がすべきことの中に入れ込まれた部分もあるのですが、今は無いプレーパークをつくっていくという、新しく行動するという意味では、そういう部分というのはこちら側に、上のほうに移せる要素もあるのかなと思います。何かこの点についてはご意見ありますか。

○藤本委員

これ、どのカテゴリーに持っていくと有利になっていくとかあるのでしょうか。何でも行政に、というところになり、結局行政が回らなかつたら意味がないので、プレーパークをつくるのを地域の方が入って作っていくとか、営利団体が作っていくのも良いと思います。

○和泉部会長

そういう場をみんなで作っていくと。

○藤本委員

行政がすべきところの①のところなんかは別に上に持っていった方がいいのかなと思います。

○和泉部会長

そうですね。

○藤本委員

ここの表現は、前から「行政がすべきこと」でしたか。

○永見課長

こういう言葉ではなかったです。前の資料では、「その他」という書き方でした。その他というのはどうかなということで、こういう書き方に変えました。

○藤本委員

区民としては行政にやってもらえると楽ではありますが、「行政がすべきところ」という表現だと我々としては無責任すぎる感がちょっとあるので、できれば言葉としてこの「新しい価値の創出」のほうに持っていきたいですね。この「行政がすべきところ」、別に誰がやってもいいと僕は思うのですけれども、行政がではなくて。

○染谷委員

あるいは「区民と行政の協働」でもいいですね。

○藤本委員

そうですね。

○染谷委員

例えばそのプレーパークにしても、企画はそういう行政から発したとしても、誰がつくるかというところで、住民全員が参加できるような、年齢層も幅がある中で参加するかどうか。そういった住人全員参加型のようなプロジェクト等の仕組みをたくさん作るということも、細かく作るということも大事だと思います。地域も会費をとるのは大変だったりということから始まると、なかなか地域に興味湧かないとか、負担感とか責任感とか、やっぱり興味がないからだったり、楽しくない、面白そうじゃないということだと思うので、それをどうにかして楽しめるようなプロジェクトをたくさん作っていく。そのプロジェクトもいろいろな人が、いろいろな業種の人が、あるいはいろいろな趣味の人が、別々でもいいのですけれども、すごく細かくプロジェクトを考えていくのも良いことだと思います。

○和泉部会長

民生児童委員さんの猿田さんいかがですか。この地域の方々、高齢化している住宅地なんか最近増えてきている部分もあるし、新しい住民の方が入ってくる地域もあるし、いろいろな地域があると思うのですけれども、そういった中で子育てを応援したいという方とかそういった方々のつながりというのをどう見つけていけばいいのか、作っていけばいいのかということについて何かご意見はございますでしょうか。

○猿田委員

地域も高齢化、町会・自治会も高齢化してなかなか若い人が入ってこない悩みはありま

す。それぞれ地域で地区委員会というものがありまして、私の地域もミニリーダーをやっているのですけれども、子どもたちが集まってきます。でもなかなか、子どもたちは集まってくるのですが、その保護者の方の協力を得るのがなかなか難しいところもあります。何か行事をやったときに「預ければいいのかな」と、保護者のほうが引いてしまって。一緒に参加してくれるともっと輪が広がるのですけれども、なかなかそういうところが難しい。それぞれ地域でもイベントとかいろいろな行事をやりませんが、子どもたちがなかなか来ない。それが最大の悩みなのかなと思います。子どもと一緒に親がついてくると楽しんでくれて、「ああ、こんなことやっているのだ」という理解をしてくださるのですけれども、なかなか参加しようという気に、若いお母さんたちがならないのかなと思います。各家庭でいろいろやるのが最近が多いのかなと思うのです。集団の中に入るより、自分たちの家族でどこか出かけてしまったほうがいいのか、そんな感じを少し受けるのですけれども、地元ですから、子どもたちが多く参加して、その子どもたちと知り合いになってその輪が、保護者たちと広がるともっていい地域づくりができるのではないかなと思うのですけれども、なかなか子どもの参加が少ないというのが最大の、どの地域でも悩みではないかなと思います。

○和泉部会長

それは親に余裕がないのでしょうか。それとも地域とのつながりは不要だと思っているのでしょうか。

○猿田委員

確かに町会・自治会に入るという方も若い方たちは、町会・自治会の参加については、何か引いてしまうところがあります。「会費を集めるのが嫌だ」というのはあるのですけれども、会費を集めながら、その人と会費を集めながら知り合いになって、この地域にこういう人がいるのだというのが分かるから、当番制でやってくださるところもあるのですが、面倒くさいからと、働いている方が多いので、集めるのも大変なのです。そういうのも町会・自治会としては考えていかなければいけないと思います。地域でも一生懸命頑張っているのですが、子どもたちと、保護者の方とふれあう場をどんどん作っていかねばいけないかなとは思っています。

○藤本委員

本当にそのとおりだと思います。そもそも安心安全のところは地域で、地域が子どもを育てることが必要で、大人になっても地域同士でつながり合えるということで、全体が良

くなるのかなと僕は思います。一方で、現実には深刻だとも思います。参加されない方は、多分、おそらく単純に地域に関心がないですし、負担感もすごく感じますし、大変でしかないというところしかないのです。その地域に子どもたちを入れることによって、子どもたちがどう育つのかというのですけれども、結局ゴールが見えない。いわゆるメリットというのが見えないからこそ、関心がそっちに向かないということなのかなと思います。

○安藤委員

マンションなんかだと、「隣に引越しました」と昔は挨拶したのだけど、今は絶対行かないでくださいということもあるそうですね。

○藤本委員

難しいところで、個人情報でポストにも名前を張らないところもありますからね。

○安藤委員

町会の名簿つくるのでも電話番号教えてくれない人もいますから。

○藤本委員

難しいですよ。

○安藤委員

非常に難しいです。だから防災訓練を毎年9月1日にやっているけど、若い人で、参加するのは、本当に数えるほどですよ。それこそ高齢者ばかりが集まってくる。

○猿田委員

ミニリーダーなんかをやっていると、卒業した子が高校生、大人になって戻ってくるのです。そうすると「ああ、やっていてよかったな」という喜びは感じますけれども、そういう子がもっと増えてくれると地域がもっと活性化するのではないかなと思っているのです。

○和泉部会長

10年ではきかない、すごく長い目で見ないといけないことですね。

○相川委員

我が子はミニリーダーに参加させてもらっていて、参加させている理由の一つは地域でいろいろな大人の人と知り合ってほしいからなのですが、参加しない人は何でなのかという理由は様々だと感じています。土日にミニリーダーがあつて、でも日曜日にサッカーの習い事があるからそっちを優先してしまうといった、ちょっとした理由だったりもします。防災という意味だと、防災訓練をやっても「子連れ」に特化したテーマで防災の話

をしますよというところに関心を持つ方もいらっしゃると思います。あとは障害を持っているお子さんに特化した話とか、そういう個別具体的なテーマを打ち出すと子育て世代でも関心を持って参加される方も少し増えるかなという気がしています。

そういったお知らせを知る機会が今、区の掲示板だけとなっていることも課題だと思っています。町会・自治会に入っている人はチラシがもらえるのですが、区民のひろばや町会・自治会の掲示板に張られているだけなのが現状です。小学校に入ればチラシも来るのですが、お母さんたちはネットで、スマホで情報を検索して、区のホームページでそういった情報がすぐに目に入るかというとなかなか入ってきません。今、中野区はマチマチという SNS と提携していて、そこに登録していると町会のイベント等を知る機会があるのですが、そこまで利用者がいるかというところ、まだいけません。今後上手に ICT ツールを利用していくことで若いお母さんたちにアクセス、リーチできて、参加者も増えていく可能性があるのではないかなと思います。ICT を活用するというのは、まさに今後 10 年というのはキーワードになると思います。町会・自治会においても、例えば町会・自治会の担当になった方が ICT を使える講座を区が支援することで、ICT 面での底上げになるかもしれないと思います。細かい話ですけども、そういう地道なことも少なからず必要だと思います。

○安藤委員

これから AI の世界に入っていくからね。幼稚園からの連絡でも、連絡アプリといって、全部の保護者に携帯アプリで連絡しています。今やっていることも写真も送れます。非常に便利です。今まで、朝、幼稚園では、電話鳴りっぱなしだったのです。「きょうは休みます」「お弁当ありません」といったように。もうてんでこ舞いでした。導入してからは 1 つもありません。全部連絡アプリでやりますから。あんな簡単なものがあるのかというぐらいです。ただ、公立の学校はまだそこまでは入れにくいのかなと思います。

○藤本委員

中野区はちょっと遅く感じますね。

○相川委員

学校からのお知らせもメールで「運動会やります」「やらないです」などは来ています。

ICT つながりの話題ですと、私の子どもが小学校に入った当初は、学校の行事写真を買うのは、学校に行って展示している写真の番号を控えなければいけなかったのが、最近ネット販売になりました。学校も徐々に徐々に変わってきていて、その分、親が学校に

行く頻度も減ってしまって寂しいところもあるのですが、うまくICTとつき合っていると良いと思います。

○和泉部会長

答申に関わるような部分については、発言というのはできたのではないかなと思っておるのですが、次回第5回が最後で、部会としての取りまとめといったところになってきます。今日もあと残りの予定としては10分程度ありますので、その中でまだ言い足りなかったな、あるいは環境や周辺部分、あるいは核心の部分でも構いませんけれども、もしご発言が足りないと思われる点がありましたら、ご発言いただければと思います。

○城山委員

最後にこれを確定する感じですか。

○和泉部会長

部会として確定したうえで全体会に。

○城山委員

持っていくということですね。

○藤本委員

次の回で確定させるのですか。

○和泉部会長

次回が部会としては最後の回になります。

○今村委員

今まで出なかった観点でつけ加えられたらと思うのは、これから中野駅周辺の再開発が進んでいく中で、このエリアの変化というのは、ここから10年間中野区の変化の1つの象徴だと感じています。その中でこのエリアに大学がたくさん集中しているということは中野区にとっての新しい財産だと感じていますので、教育・子育てにおける大学と地域と連携というのは進めていける事例になったら良いと思います。事例ですけれども世田谷区は、大学による子どもたちの居場所づくり事業というのをこの10年ぐらい随分進めていて、日大の文理学部等が核になって子どもたちの居場所を定期的に運営したりしていました。例えばそういうようなことも中野区においてもできたら良いと思います。

○藤本委員

自発的にやっているのはありますけれども、全体的にそういう機運があるといいですね。

○今村委員

そうですね。ポイントは、中野区というと在住者が中野区民だと捉えがちかもしれないですけど、これだけ流動性の高いまちなので、中野区に通ってくる人たちの力というのも重要で、その人たちも含めた基本構想になっていくと良いと感じました。

○城山委員

共働きで子どもを育てるというロールモデルも、例えばキリン等いろいろな企業が中野区にはあるので、そういうところとタイアップして中野のイメージを上げるようなものもやってもいいかなと思います。別に中野に住んでいなくても、中野に通っている企業の人たちがどう子育てをしているかといったことを。

○藤本委員

キッズニアじゃないですけども、それこそ各地域の商店などで子どもの体験とか良いと思います。

○和泉部会長

中学生の職場体験というのは、いろいろ課題もある取り組みかなとは思っていて、本当にいい経験をした中学生もいれば、形だけのもののような体験もあったり。

○藤本委員

実際は小中連携でそういう体験をして、研究会等でお互いに言い合ったり、そういうのがもっと広がれば良いと思います。

○新庄委員

今、中野区でも大学との連携をやってらっしゃると思いますけれど、大学や企業の人が、例えば学校現場に行って話しをする、成功体験や自分は小さい時にこんな夢を持っていて、こんなふうを実現したとか、そのようなことを聞かせてもらうだけでも子どもたちにとっては、とても良い学びになると思います。それが地域の教育力を活用することになるかと思えます。そういう部分が文言として少し入ってくると良いと感じました。

○相川委員

現行の基本構想との対応表を見て思ったのですが、図書館との連携のところがありません。とはいえ図書館に特化する必要はないとも思いますが、中野区はサブカルチャーのイメージが強い区だと思うので、子どもと文化、または歴史というものを学んで育ててまた表現できる、そのような子どもが育っているというようなことを入れられるといいのかなと思いました。中野区は図書館もたくさんあって、図書館のホームページも子ども用のページがあったり、予約もしやすくなっていたり、また学校も、今度統廃合する学校

では、地域開放型学校図書館という形で図書館を作ると聞いています。私もしっかりとイメージできていないのですけれども。図書館で本と親しんで卒業した後も、例えば、地域開放型学校図書館に通うような形で学校・地域との関わりが続いていくような環境が推進できると、とても良いと思いました。例えば大学の図書館に子どもが行っていい機会を作るのも面白いかと思います。まだ正直本の内容は理解ができないかもしれませんが、「こんなにいろいろな本があるのか」ということを経験すること、大学という場に行ける機会を作るという意味では良いと思います。

○和泉部会長

図書館というのは、役割がどんどん変化をしている部分で、本を貸し出せば、あるいは本を収納しておけばいいというだけではない役割が広がっていると思います。人が集まる場所という使い方というのも色々な自治体の取り組みがあります。例えば武蔵野市の武蔵野プレイスはまさにそういう場所です。図書館でありつつ多機能な機能を持つ場。ただ、そういう姿が中野に今、本当に必要なかどうか。大学図書館には、専門書で子ども向けではない本が収納されているので、そこについては区立図書館との連携の中で、小学校の調べ学習も含めてその発展の段階で本当にその資料が必要なのだというときのリファレンスとして使うというのも一つの方向性かと思います。

もう少し定義を広げてみると、中高生が使いやすい資源の中の1つとして、図書館も位置づけられるのかなと思います。

相川委員

私、埼玉の大宮に中学生の頃から住んでいたのですが、図書館に自習室があって、そこで試験に向けて勉強したりできたのですが、中野区は、子ども向けの自習室というのはあるのでしょうか。

○城山委員

図書館にあると思います。

○相川委員

一応図書館にあるのですね。

○城山委員

中央図書館に、小さいですけど。

○相川委員

でもテーブルだけで、個別ブースはあまりないですよ。中野区の住宅事情という背景

を考えると少ない気がします。自分の部屋を我が子もまだ持っていませんが、例えば思う存分勉強できるような場が地域にあり、勉強したい子はそこで自習できるという環境があってもいいのかなと思いました。

○城山委員

あまりないんですよね、自習室が。

○藤本委員

あとは区民活動センターを借りて、そこの机で勉強する程度ですよ。

○相川委員

学校に残って勝手に勉強するのはダメなのですよ。

○藤本委員

時間外は、校舎の中に入れてはいけません。先生が見守っていなければならないから。校庭は開放していますけれども。

○和泉部会長

中高生への支援、若年世代への支援という観点を。

○相川委員

中野区の民間では今、アウトサイダー・アートを推進しようと活動している方たちがいらっしゃると思います。アウトサイダー・アートとは、障害がある方がアートの文脈とは別に、すごいものをつくっている、という位置づけのアートです。中野サンモール商店街などにもポスターを張ったりする活動をされているのを拝見しています。そういったところと連携してダイバーシティを学ぶ教育を中野区は推進していますといった、そういうきっかけづくりを今後10年間で取り組んでいけないでしょうか。例えば障害があってもこんなふうには活躍する場があるということを学べると思います。せっかくそういう資源が中野にはあるので、それを活かしたらいいのかなと思います。

○城山委員

素人が気軽に演劇や絵画等のアートをするのは、私はすばらしいと思っています。高齢者の演じる劇を観に行きましたけど、普通のおばあちゃん、おじいちゃんが、舞台上で頭をゴンと打ったりしつつも頑張っていて、すごく素人の良さが身近な感じで良かったです。

○相川委員

中野には、お笑いなどのすごく小さな劇場やギャラリーもたくさんありますよね。

○城山委員

中野の特徴というのを出すような芸術、地域の学習、歴史とかいろいろなものを打ち出すべきですね。特徴がないと、どこの基本構想も一緒ですよ。中野らしさというのをどこに出すか。

○藤本委員

僕が子どものころ、中野ってどういうイメージがあったかと思うと、「芸人のまち」です。楽しいなと子どものころは思っていたのです。

○城山委員

今でも公園の周りとかで練習していたりしますのもね。漫才とかね。

○藤本委員

あとはアニメとかゲームとか。第二の秋葉原といわれている。そういうのも子どもたちが喜ぶものになるのかなと。今、中野ブロードウェイなんか子どもたちは逆に入れない。入ってはいけないのですよね。子どもは、ゲームセンターに入ってはいけないと制限されていますけれども、むしろそれこそ、中野ブロードウェイが、中野区といたらアニメ等のイメージがあるのであれば、そういうところをもっと開放的にして、子どもが入りやすい環境にしてもいいのかなと思います。

○相川委員

今年中野ブロードウェイにあった子ども向けおもちゃ屋さんがなくなってしまって、中野区におもちゃ屋さんがなくなってしまったのです。

○今村委員

中古おもちゃ屋さんはあるんですけどね。今回の5つの柱の中で、子どもの権利の条例化というのはすばらしいとっていて、さらに、この決め方をオープンガバメント的なやり方でやるというのもすばらしいと感じています。全ての議論に10代以下の意見が今のところ入っていないところです。基本構想はともかく、子どもの権利条例化の際には、子どもたちの意見というものが話し合われる場が必要ではないかなと感じました。

○和泉部会長

子どもたちが主体となってかかわる。そういった子どもの権利条例の制定ということですね。

○今村委員

そうです。

○和泉部会長

では、次回の第5回の部会につきましては次第の下に記載がございますけれども、8月15日の木曜日の19時から、会場は中野区役所を予定しております。この第5回の部会は、この部会の最後となりますので、部会としては審議内容の取りまとめをしたいと思っております。

その前に第2回の全体会がございます。各部会でのこれまでの審議状況の報告と共有を行うということになっております。臨時委員の方を除き委員の方には出席をお願いしたいと思います。7月29日の月曜日、19時から会場は中野区役所を予定しております。また、子育て・教育部会からの全体会の報告内容につきましては、資料1の子育て・教育部会第2・3回審議内容の概要を中心に、本日ご審議いただいた事項を反映したものしたいと思います。その他、事務局から連絡事項などありますでしょうか。

○永見課長

きょうはお車の方はいらっしゃいますでしょうか。いらっしゃらないようですので以上です。

○和泉部会長

以上をもちまして中野区基本構想審議会子育て・教育部会第4回を閉会させていただきます。お疲れさまでした。

— 了 —